

書評

岩田健太郎，豊浦麻記子 著

感染症外来の帰還

筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター・総合診療科

徳田安春

『…の帰還』というタイトルから、筆者の頭にはまず、立花隆氏の『宇宙からの帰還』が浮かんだ。立花氏のノンフィクションは、宇宙から帰還した宇宙飛行士の精神世界の変貌を詳細に報告した大作である。研修医世代では、RPGのファイナルファンタジーIV「月の帰還」などを連想するだろう。でも、「はじめに」を読み進めると、『感染症外来の事件簿』を書き直したということで、“帰還”というタイトルとなったことが理解できるようになる。

『感染症外来の事件簿』は“帰還”すると変貌していた。岩田氏の前著の読者対象は研修医となっていたが、本書の対象は「より幅の広い臨床医」となっている。しかも今回は、沖縄県立中部病院インターン時代の同級生である豊浦麻記子氏との共同執筆ということで、小児科領域の感染症診療もカバーしている。

Implementation Scienceによると、社会において、新しい知識体系を次々に紹介するInnovatorの後をフォローするのはEarly adopterであり、その後速やかに大多数のEarly majorityが続き、そして遅れてその後にLate majorityが続く。岩田氏と豊浦氏がInnovatorである理由は、本書を一読するとすぐに理解できる。Innovatorは、既存の知識体系とは異なった切り口で新しい知識体系を構築する人々のことである。本書は、ブログ的な散文調の流れで読みやすく書かれているが、全体を通して著者2人の個性的な切り口による思考過程で体系化されている。

これまで数多く出版されてきた岩田氏の書籍を読み、臨床感染症の知識体系をすばやくフォローしている研修医や若手医師はEarly adopterである。しかしながら、新しい知識体系が社会全体を変え

る「うねり」となるためには、大多派のEarly majorityの行動変容を促すことが必須である。全国で研修医は年間で約8,000人であるが、医師の総数は約27万人であり、開業医師総数は約10万人という。このうち、感染症診療に全く関与しないという医師はほとんどいないであろう（精神科医師などを除いて）。著者が述べているように、本書は「中庸」的内容であるが、適度に「中腰」も勧めており、臨床現場でのバランス感覚を重視しているのがよい。“私の処方箋”的な具体的処方内容例も提示されており、現場の臨床医にはうれしい限りである。いつものブラックジョークも満載であるが、本書を読んでも、医学教科書を読んだときのような「疲れ」を感じないのはそのせいであろうか。

宇宙から帰還した飛行士がその精神世界を変貌させたように、本書が多くのEarly majorityの感染症診療を変貌させることを期待する。

〔A5 頁488 2010年 定価
4,935円(本体4,700円+税5%)
医学書院刊〕